第　40　号

県中教研 社会部会だより

発 行 日　令和7年3月
発 行 所　富山市千歳町1－5－1
富山県中学校教育研究会
編集責任者　富田　賢一
題　　字　金山　泰仁　先生

「思考力、判断力、表現力等」の育成

指導主事　蛯谷百合子

学習指導要領社会科の目標には、「社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う」ことが示されています。「説明したり、議論したりする力」とは、生徒が考察、構想（選択・判断）したことを、資料等を適切に用いて論理的に示したり、資料等を根拠に自分の意見や考え方を伝え合い、自分や他者の意見を発展させたりする力と捉えられます。

本年度の研究大会では、社会的事象を多面的・多角的に考察し「思考力、判断力、表現力」等を育成することを目指した授業実践が行われました。「元寇（モンゴル帝国の襲来)」についての授業では、「ユーラシア大陸からの影響によって、日本にどのような変化が起こったのだろうか」という単元を貫く問いに対して、生徒は資料から読み取ったことを基に予想を立てていました。「元寇」は小学校で既に学習していますが、生徒はこれまでに得た知識を基に考えるだけではなく、根拠を明確にして自分の考えをまとめていました。その際には、ICTを活用し、対話をしながら自分の考えと他者の考えとを比較したり関連付けたりすることを通して、自分の考えに一層確信をもったり修正したりする生徒の姿が見られました。

自分の考えが相手に分かるように説明したり、相手の意見に対して同意や異議の考えをもちながら議論したりすることは、生徒が自分の考えを客観的に吟味することにつながります。「思考力、判断力､表現力等」の育成をより一層図るために、全体で考えを共有する場面では、生徒が社会的事象を多面的・多角的に考察し、自分の考えを客観的に吟味しながら発展させて表現できるよう、教師が発問や問い返しを工夫し、立場を明確にしながら発表させたり、焦点をしぼった議論を促したりすることが大切です。

（東部教育事務所）

「個別最適な学び」と「協働的な学び」

県部長　富田　賢一

本会は、「令和の日本型学校教育」の理念に則して研究しています。令和の日本型学校教育は、社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となる中、従来の日本型学校教育を発展させ、全ての生徒の可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの充実を図ることが目指されます。

各地区の研究大会では、ICT・一人一台端末を活用する場面や、グループに分かれて話し合ったり討論したりする場面が見られるなど、まさに令和の日本型学校教育を意識した授業が展開されました。その後の協議会では、一人一台端末を用いた授業の参観者の視点のもち方、デジタル教材とアナログ教材の融合したハイブリッド教材の活用法といった、令和の日本型学校教育を推進しているからこその今日的テーマも話し合われました。

富山地区・高岡地区の研究大会では、「授業力向上のためのアドバイザー事業」として文部科学省 初等中等教育局視学官の藤野敦先生をお招きしました。藤野先生には、学力向上に向けた指導力向上を目指して、学習指導要領の改訂・指導計画作成・課題（問い)・評価についてご指導いただきました。学習指導要領の改訂では、「どのように学ぶか」という学習の過程や方法を大切にしながら、自らの力で課題を解決していく資質能力の育成を目指していると教えていただきました。

県中教研社会科の研究推進研修会では、令和７年度から３年間の「研究の構想」や令和７年度の「研究計画」の改訂を検討しています。その中で、令和の日本型学校教育が目指す個別最適な学びや協働的な学びを研究の方向性として取り入れる予定です。

今後も、引き続き、本会が大切にしている、主題の解明を図るための研究主題と研究内容（P：Plan・計画)、授業研究と研究発表（D：Do・実践)、学力調査（S：See・評価）のP － D － Sのトライアングルの関係を重視して研究を進めていきます。

（富・南部中）

第 68 回 研 究

新　川　地　区　（黒・清明中）

（1）研究授業

川村直弘教諭が、１年地理的分野「世界の諸地域　アフリカ州」の単元で、「日本政府の支援は、ナイジェリアの貧困を解決する手段として有効なのだろうか」という学習課題で授業を行った。

生徒は、「有効である」・「有効ではない」の２つの立場から、根拠となる資料を提示して意見を発表した。

その後、次の活動である質疑応答のための準備として、学級全体で自由に意見交換した。意見交換時は、一人一台端末を用いて疑問に感じたことを調べたり、事前に準備した資料を参考に同じ立場の生徒同士で情報を共有したりするなど、主体的に学習に取り組む姿が見られた。終末では、それぞれの立場の主張や質疑応答での内容を基に、今後の日本政府の支援の在り方について意見をもち、学級で共有した。

（2）部会協議

部会協議①では、大茂孝二郎指導主事（東部教育事務所）から、多くの学術書や資料を基に教材開発が行われていたことを評価いただいた。また、これからの社会科の在り方として、現代社会の現状を理解し、今後のあるべき姿を考える未来志向型の授業や他の生徒との議論を通して自分の考えを再構築していくための学習形態、生徒が主体的に活動できる場面を多く設定することが重要視されていくことについてご助言をいただいた。

部会協議②では、「主体的に学び、自己調整しながら学習を進めることができる生徒を育成するための指導の工夫はどうあればよいか」をテーマに協議した。発展的な学習を設定する際の注意点や生徒が解決したくなるような学習課題の設定、見通しをもった授業展開、個別最適化された学び等について意見交換した。

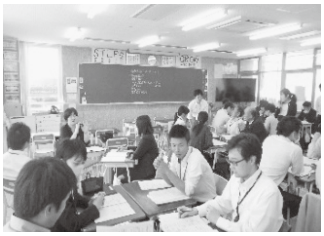
桂　明日菜（下・入善中）

富　山　地　区　（富・芝園中）

（1）研究授業・部会協議①

松村香菜教諭が、２年地理的分野で「中部地方で発展している産業の特色には、地理的条件がどのように影響しているか」という学習課題で授業を行った。生徒は既習事項を基に地域的特色について話し合い、キーワードを付箋に書き出して模造紙にまとめた。全体発表を通して、他のグループの考えに触れることで、自分の考えをさらに深めていた。福山暁雄主任指導主事（西部教育事務所）からは、地域の課題や持続可能な社会づくりに目を向けさせることや、身に付けた知識を基に話し合う学習活動を充実させることの大切さについてご助言をいただいた。

寺崎宏昭教諭が、１年歴史的分野で「鎌倉幕府が滅亡した要因は何だろう」という学習課題で授業を行った。生徒は予想を立てた上で、教師が用意した資料を基に小グループで考えを深めた。意見交換の場面では、スプレッドシート等のICTを活用した。蛯谷百合子指導主事(東部教育事務所)からは、話合いにおいて生徒同士をつなぐ教師の働きかけの大切さや、「多面的・多角的に考察する」とはどのようなことか、その本質について教えていただいた。



（2）部会協議②

授業力向上アドバイザーとして、文部科学省初等中等教育局視学官である藤野敦先生に、「社会的事象を主体的に追究する生徒の育成のために－『課題を追究したり解決したりする活動』を通した学習の推進と、指導と評価－」と題して講演をいただいた。藤野先生の説明を通して学習指導要領の記載内容を改めて確認することにより、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業をイメージすることができた。また、課題を追究したり解決したりする活動について、「見方・考え方」と「課題（問い）」の設定との関係や単元設計の大切さ等、授業改善の視点を学ぶことができた。

中川　知之（富・堀川中）

大 会 報 告

高　岡　地　区　（氷・北部中）

（１）研究授業

阿部公輔教諭が、２年歴史的分野「近代国家の歩みと国際社会」の単元で、「19世紀の江戸幕府の通知表を作成し、幕府が滅んだ理由を明らかにしよう」という課題で授業を行った。19世紀の江戸幕府の取組について前時までに評価し、まとめた「通知表」の内容を発表し合い、意見交換した。

「通知表」を６つの立場（農民・町人・大名、武士・朝廷・外国人・幕府）に立ち、国内政策と対外政策の両面から作成し、幕府が滅んだ理由を多面的・多角的に考察する生徒の姿が見られた。

（２）部会協議

部会協議前半の研究協議では、「生徒が自信をもって自分たちの意見を述べており、日頃の指導の成果が出ていた」「毎時間、19世紀の江戸幕府の取組に対する評価を行う活動を設定することが、生徒が終末におけるまとめを意識して学習を進める上で効果的であった」等の意見があった。

福山暁雄主任指導主事（西部教育事務所）からは、19世紀の江戸幕府の取組を評価する活動において、現代の政治や社会情勢等も念頭に置きながら考察したことで、生徒は歴史を学ぶ意味を感じていたのではないかとご意見をいただいた。また、指導と評価の一体化を図ることや、主権者教育や小中接続を意識して授業づくりを行うことの大切さについてご助言をいただいた。

後半は、「社会的事象を主体的に追究する生徒の育成のために－『課題を追究したり解決したりする活動』を通した学習の推進と、指導と評価－」と題して文部科学省初等中等教育局視学官の藤野敦先生から、本単元における阿部教諭の実践も踏まえてご講演をいただいた。

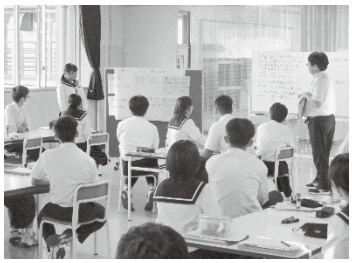
本研究大会から学んだことを、今後の教育実践に生かしていきたい。

中山　隼人（氷・西條中）

砺　波　地　区　（小・石動中）

（１）研究授業

市川義浩教諭が、３年公民的分野で「将来、自分たちが住み続けたいと思える小矢部市にするためには、小矢部市はどのような政策を行い、自分たちはどう関わっていけばよいか」という学習課題で授業を行った。単元のまとめに当たる本時では、小矢部市の総合計画の中から各生徒が特に重点的に取り組むべきと選んだ政策とその理由をもち寄り、グループで再度政策の優先順位について話し合い、理由とともに発表した。



地域教材を生かした単元構成や学習課題の設定、小矢部市役所職員の方をゲストティーチャーとして招いて生徒への助言等で単元を通じて何度も関わってもらったことが、生徒の主体的な学びを促し、地域住民としての自覚や市政に積極的に関わろうとする態度を育てることにつながった。

（２）部会協議

部会協議では、生徒が学びを振り返りながら主権者として地元の課題について真剣に考えていた姿が見られた一方で、生徒が資料から考えの根拠を示すようにしたり、教師が市内の様々な立場を想定させたりすることで、より多面的・多角的な思考を促せたのではないかという意見があった。

橘恭幸指導主事（西部教育事務所）からは、「地域教材を生かし、学びが連続するように単元を貫く問いを設定して振り返りを毎時間行ったことは効果的であった」「政策の実現には予算の議決が必要であること、そして、その予算を議決するのは議会であるという認識を事前に生徒にもたせる必要がある」とご助言をいただいた。

協議の後半では、各校での実践をもち寄って、問題解決学習を意識した単元構想やその取組について意見交換し、学びの多い大会となった。

本田　祐樹（南・城端中）

中新川郡中教研社会部会・活動報告

５月の研究部会では、「生徒自身が意欲的に学ぶ力を高める課題を設定し、地理・歴史・公民を関連付けた学習活動の工夫」という議題の下、各校での取組について話し合った。振り返り段階でICTを取り入れることで自分の考えを推敲しやすくしたり、１枚のスライドを共同編集して作り上げることで対話的な学びを行ったりする事例や、ウェビングマップやテキストマイニング等の思考ツールを紹介し合った。

９月には、雄山中学校の寺島優里教諭が、１年地理的分野の世界の諸地域の単元において「ユーラシア大陸の広い範囲を占めるアジア州では、気候にどのような特色が見られるだろうか」という学習課題で研究授業を行った。授業の導入部分では、デジタル教科書を用いてトンレサップ湖の雨季と乾季の写真を拡大提示し、生徒の興味・関心を引き出していた。その後、「トンレサップ湖の景色が雨季と乾季で異なるのはなぜか」と生徒に問いかけた。生徒には、季節風の向きが分かる資料やアジア州の地形図等を配布し、資料を基にグループで協議を行うことで、「アジア州で見られる地球的課題の要因や影響を、州という地域の広がりや地域内の結び付き等に着目して、それらの地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現する」という単元を貫く問いを解決しようとする授業であった。

部会協議では、本時の学習課題の確認だけでなく、単元を貫く問いの意識付けや、「主体的に取り組む態度」の評価、ICTの効果的な活用場面等について意見交換を行い、多くの気付きを得ることができた。今後も活発に情報交換し、よりよい実践につなげていきたい。

松村　　航（中・上市中）

射水市中教研社会部会・活動報告

６月の研究部会では、伏木富山港への巡検を行った。港湾事務所の職員の方と共に港湾施設や新湊大橋を見学した。日本海側有数の港湾施設や月40便の充実した定期便の説明を聞き、環日本海・アジア地域の交流・物流拠点としての役割の大きさを改めて知ることができた。

９月は研究授業を行った。大門中学校の梶川まるみ教諭が１年歴史的分野の「展開する天皇・貴族の政治」の単元において「平安時代にはどのような特色をもった文化が生まれたのだろうか」という学習課題で授業を行った。本実践は課題に取り組みやすいように奈良時代の文化との比較を取り入れた。その際に「衣」「食」「住」等の視点ごとに絵画資料を一人一台端末で配布したり、京都の博物館で購入した絵巻物のレプリカ教材を提示したりするなど生徒の興味・関心を高め、主体的な学びを引き出すための工夫が随所にみられた。

その後、部会協議をグループ毎に行った。協同的な学びをサポートするICTの活用や文化の授業を知識注入型の授業で終始しないためのアイディアについての意見交換が活発に行われ、多くの気付きや学びがある協議会となった。

２月は実践紹介を行った。黒川雄介教諭（大門中）、杉本真澄教諭（新湊中）、橋本晃洋教諭（小杉中）の３名の教員が１年間の実践を振り返り、その中の一押しの実践を部員に紹介した。授業で使用したワークシートを交え、発問や生徒の反応等を紹介した。「来年度、勤務校で同じ授業をしてみたい」「～の部分を自分の学校用にアレンジして実践してみたい」等の声も聞かれた。今後も射水市部会では教員同士で学び合い、高め合う部会であり続けたいと願っている。

杉木　貴昭（射・射北中）